



Title	‘Intercomprehension’ の定義的曖昧性とその和訳表現の妥当性
Author(s)	上田, 直輝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 13-22
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88398">https://doi.org/10.18910/88398</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ‘Intercomprehension’の定義的曖昧性とその和訳表現の妥当性

上田直輝

### 1. はじめに

日本ではまだあまり知られていないように思われる言語学概念で‘intercomprehension’<sup>1</sup>というものがある。Ollivier & Strasser は学術出版物、授業案内、機関等のウェブサイトなどを調査対象として intercomprehension の定義を言語横断的に、つまり英語の intercomprehension だけでなくドイツ語の Interkomprehension やフランス語の intercompréhension なども含めて分析した。そして分析の結果、この用語の使用に関して 2000 年代以降の急速な増加が確認された (Ollivier & Strasser 2013: 26–27)。また、Ollivier & Strasser による図書が出版された 2013 年以降についても、少なくとも Google Books Ngram Viewer の検索結果を参照する限り、この用語の使用は増加傾向にあると見てよい。<sup>2</sup>

本論の目的は二つあり、一つ目は、日本国内で認知度の低い概念 intercomprehension に関する情報を Ollivier & Strasser (2013) を中心に据えながら提供しつつ、その定義の難しさを先行研究に基づいて改めて述べることである。そしてもう一つの目的として、日本語で執筆された論文・図書における intercomprehension という概念への言及を紹介しながら研究者が intercomprehension に充ててきた和訳を挙げ、それらの和訳が抱える問題点を指摘する。

### 2. ‘Intercomprehension’の定義的多様性

Intercomprehension という概念の歴史は Ronjat (1913) がフランス語で執筆した博士論文で用いた‘intercompréhension’に遡ることができるとされ (Gilles 2017: 113)、この論文において intercompréhension という語が意味していたのは異なる方言間で行われる会話だった (Ollivier & Strasser 2013: 11)。だが、今日 intercomprehension の定義は多様であり、Behrend (2016: 34) や Doyé (2005: 7) は「統一的な定義が存在しない」と述べている。とはいうものの、実際には intercomprehension の定義についてある程度の分類が可能である。112 の定

<sup>1</sup> この語は国際語彙 (英: internationalism) であり、英語では‘intercomprehension’、ドイツ語では‘Interkomprehension’、フランス語では‘intercompréhension’という語が用いられるが、本論では 3 言語のうち日本国内の読者が最も多いと想定される英語の綴りを優先的に用いることとする。ただし Meißner (2020: 34) によると、ドイツ語の Interkomprehension はフランス語の intercompréhension とは異なるニュアンスをもつ。たとえばロマンス語圏において didáctica do plurilinguismo と didactique de l’intercompréhension はよく同義語として用いられるとされる (Meißner 2019a: 49) 一方、ドイツ語圏において Mehrsprachigkeitsdidaktik (<複言語主義 Mehrsprachigkeit) と Interkomprehensionsdidaktik は筆者の知る限り同義語として使われていない。

<sup>2</sup> Google Books Ngram Viewer (<https://books.google.com/ngrams>) にて以下のワード・条件で検索した。検索ワード: “intercomprehension,Interkomprehension,intercompréhension”、検索条件: Years (1980–2019), Corpus (English 2019), Case-Insensitive (on), Smoothing (0) (最終閲覧 2022 年 4 月 21 日)。

義を分析した Ollivier & Strasser (2013: 26–28, 30) は、先行研究において *intercomprehension* という概念に与えられてきた定義が大きく三つのカテゴリ（具体的には *praxeological*・*didactic*・*cognitive*）に区分可能だとした（だが同時に、彼らは複数のカテゴリに分類可能な定義づけも存在すると認めている）。また、彼らは便宜的な理由から *praxeological* な *intercomprehension* を IK（独：Interkomprehension から）、*didactic* な *intercomprehension* を IK-Didaktik、*cognitive* な *intercomprehension* を IK-Kompetenz と表記している。以下ではこれら 3 つを一つ一つ取り上げるが、わかりやすさを優先して、Ollivier & Strasser (2013) における順番とは異なるものの、(1)IK、(2)IK-Kompetenz、(3)IK-Didaktik の順で記述する。

一つ目の、*praxeological* な意味における *intercomprehension*（すなわち Ollivier & Strasser の用語でいう IK）が意味するのは、異なる言語（または変種）間で行われるコミュニケーション形式であり（Ollivier & Strasser 2013: 28）、先述の Ronjat が用いた意味と概ね一致する。たとえば話者 A・B という二人の人物による会話において、話者 A が話した言語 x を話者 B が理解し、話者 B が話した言語 y を話者 A が理解するといったコミュニケーション形式である（この際、各話者が産出的に用いる言語が必ずしも母語であるとは限らない）。こうしたコミュニケーション方略は受容的多言語使用（英：receptive multilingualism、独：rezeptive Mehrsprachigkeit）とも呼ばれるが、受容的多言語使用と呼ばれるコミュニケーションは「話者が産出的に用いる言語が母語か」「口頭コミュニケーションか書記コミュニケーションか」「使われる言語同士が類縁関係にあるか」といった条件次第で *intercomprehension*、*lingua receptiva* (LaRa)、*plurilingual communication*、*polyglot dialogue*、*semicomcommunication* など様々な名称で呼ばれることもあり、その際それらの条件設定は銘々の研究者によるものである（cf. Beerkens 2010: 26–27; Golubović 2016: 133–134; Gooskens 2020: 770; Marx 2007: 166, 2012: 468）。「コミュニケーション形式としての *intercomprehension*」という定義も単純ではなく、研究者によって細かな定義上の違いが存在する。たとえば Möller & Zeevaert (2015: 314) は *intercomprehension* を「受け手の母語および／または何らかの橋渡し言語と未知の目標言語との間の類縁性を活用する、類縁言語間で行われる受容的多言語使用」と定義づけつつ、「本論文では特に書記のものを指す」と付け加えている。Duke (2019: 2) は *Interkomprehension* を「受容的多言語使用の特殊な一種で、ある程度の相互理解が可能な言語または変種の間で行われ、ふつうは近い類縁性を前提とする」と定義づけている。このように、「コミュニケーション形式としての *intercomprehension*」にも、それぞれが部分的に重複し同時に部分的に異なる多様な定義が存在する。

二つ目の、*cognitive* な意味における *intercomprehension*（すなわち IK-Kompetenz）が意味するのは特定の能力や技能（Ollivier & Strasser 2013: 28）、具体的には「それを自然な環境やきちんとした形で学んだことがなくとも、見知らぬ言語や変種を理解する能力」（Meißner 2017: 146）である。つまり、先述の *praxeological* な意味での *intercomprehension* (IK) を可能にする能力が IK-Kompetenz だといえる。そしてこの IK-Kompetenz の基礎となるのは、言語同士を比較する能力と、言語間に存在する構造的な類似性に関して推測し、知識の転移を

行う能力である。そして、これらの能力は先天的な言語習得能力と言語的な事前知識の蓄えを前提とする (Müller-Lancé 2019: 316)。

三つ目の、*didactic* な意味における *intercomprehension* (すなわち *IK-Didaktik*) が意味するのは、先述の *cognitive* な意味における *intercomprehension* (*IK-Kompetenz*) の獲得を目標とする学習アプローチ・教育アプローチである (Ollivier & Strasser 2013: 43)。<sup>3</sup> こういった学習法・教授法はとりわけロマンス語派についていくつも存在するが、類縁言語の教授法の中で最も進んでいるのは *EuroCom*<sup>4</sup>、中でも *EuroComRom* であり (Golubović 2016: 136)、「*EuroCom* は *interkomprehension*、すなわち、見知らぬ言語や変種を、それをその言語・変種が用いられる環境やきちんとした形で学んだことがなくとも解読できる能力の獲得を目指している」(Kordt 2018: 147)。同様の学習法・教授法に関するプロジェクトは *EuroCom* 以外にも既に多く存在し、特にロマンス語派について豊富である (Hülsmann et al. 2020 がロマンス語派の *intercomprehension* に関するプロジェクトを網羅的に紹介している)。

ここで一度 Ollivier & Strasser (2013) による 3 つの定義カテゴリをまとめると、(1) それぞれの話者が自言語 (必ずしも母語ではない) で表現するコミュニケーション形式、(2) このコミュニケーション形式を実践するために必要な能力、(3) この能力を育むための学習法・教授法、という 3 つ全てが *intercomprehension* という名で呼ばれるということである。Ollivier & Strasser が分析対象とした定義について数量的なことをいえば、*intercomprehension* を(1)の意味で捉える定義が 47、(2)の意味で捉える定義が 40、(3)の意味で捉える定義が 34 存在した (Ollivier & Strasser 2013: 29–30)。また、Ollivier & Strasser はこの三分類だけでなく、同時に他の分類として「交流的 *interactional*・受容的 *receptive*」、「口頭 *verbal*・書記 *written*」といった分類も可能であることも明らかにした。

「交流的・受容的」という分類について、Ollivier & Strasser が分析対象とした定義のうち 52 の定義で *intercomprehension* は交流的なものとして認識されていた (Ollivier & Strasser 2013: 31)。これら交流志向の定義づけにおいて *inter-* という接頭辞は相互的な意思疎通という意味、言い換えれば複数の言語が一つの空間で使用されるという意味で捉えられる。それに対して、*intercomprehension* を受容的なものとして捉える定義づけの数は 16 だった (Ollivier

<sup>3</sup> ドイツ語圏に関していえば、学習法・教授法という意味での *intercomprehension* は近年の論文では *Interkomprehensionsdidaktik* と表現されることが主流になっている。

<sup>4</sup> *EuroCom* はロマンス語派の *EuroComRom*、ゲルマン語派の *EuroComGerm*、スラヴ語派の *EuroComSlav* の 3 つから構成される (はずだった) が、現時点で *EuroComSlav* は未完成のままである。*EuroComRom* と *EuroComGerm* については Klein & Stegmann (2000) による *EuroComRom – Die sieben Siebe*、Hufeisen & Marx (2014) による *EuroComGerm – Die sieben Siebe* などが出版されており、特に前者に関してはオリジナルのドイツ語版のほか、英語やロマンス諸語、オランダ語やポーランド語のバージョンも存在する。*EuroComRom* による教育は上述の図書の筆者 Horst G. Klein と Tilbert D. Stegmann によってフランクフルト大学 (Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main) で 1991 年から実践され成功している (Hufeisen & Marx 2007: 317) だけでなく、その他の様々な大学で行われた試みでも成功を収めてきた (Behrend 2016: 36)。加えて、*EuroComRom* は今日ザールラント州における教職課程や学校プロジェクトの中でも実践されている (Hülsmann et al. 2000: 46)。

& Strasser 2013: 32)。こちらの定義づけにおいて *intercomprehension* は「まったく習得されていない、もしくは少なくとも産出的には習得されていない言語の理解」(Ollivier & Strasser 2013: 32) などとして認識されていた。この場合、*inter-*という接頭辞は受容的活動(すなわち理解)を可能にする、既知言語と未知言語という言語同士の間で行われる転移に関するものとして捉えられる。この「交流的・受容的」という分類に関して Ollivier & Strasser (2013: 32) が指摘しているのは、多くの定義が *intercomprehension* を交流的なものとする前提に立つ一方、*intercomprehension* に関する学習・教育プロジェクトの多くが受容志向、すなわち一方的な読解・聴解を目標としているため、*intercomprehension* の定義と実践の間にはパラドックスが存在するということである。

Ollivier & Strasser が分析対象とした定義のうち 26 の定義は「口頭・書記」という点にも言及していた。「*intercomprehension* は口頭形式でも書記形式でもありうる」という立場の定義が 15 あったが、残る 11 の定義のうち 9 つは *intercomprehension* を口頭形式のもの、*intercomprehension* を書記形式のものに限定していたのはわずか 2 つだけだった。この結果に関連して Ollivier & Strasser は、*intercomprehension* に関する大抵の学習・教育プロジェクトで訓練されるのは書記形式に関する能力(=読解能力)であり、聴解能力の育成を志すプロジェクトは少ないと指摘している(Ollivier & Strasser 2013: 35–36)。

そのほか、Ollivier & Strasser (2013: 38–39) は *intercomprehension* に関する「自然なもの *spontaneous*・訓練されたもの *trained*」という分類にも言及している。前者の *spontaneous intercomprehension* とは、先述の Meißner (2017: 146) による「それを自然な環境やきちんとした形で学んだことがなくとも、見知らぬ言語や変種を理解する能力」という定義にあるように、また *intercomprehension* という概念の初出とされる Ronjat (1913) の博士論文で '*intercompréhension*' という表現が指していたコミュニケーションのように、理解対象言語・理解対象変種について特段の知識を有しないままで行われる *intercomprehension* である。それに対して後者の *trained intercomprehension* とは、理解対象言語・理解対象変種に関する学習経験などを積んだ上で行われる *intercomprehension* である。もともと、Ollivier & Strasser (2013: 39) が指摘していることとして、*spontaneous intercomprehension* と *trained intercomprehension* は連続体上にあるとされ、たとえば EuroCom などの学習・教育アプローチによる学習を経験した者による *intercomprehension* に関して、どれだけの学習経験を積みればその *intercomprehension* が *trained intercomprehension* と見なされるのか、すなわち *spontaneous intercomprehension* と *trained intercomprehension* の境界を特定することは難しいとされる。

### 3. '*Intercomprehension*'の定義における言語横断性 *interlinguality* の問題

はじめに、本章における '*intercomprehension*' は便宜的な理由からひとまずコミュニケーション形式の意味(つまり Ollivier & Strasser 2013 のいうところの *IK*) で理解されたい。*Intercomprehension* という概念の定義が非常にバラエティ豊かであることは前章の通りだが、

intercomprehension の定義上の問題として、「intercomprehension は言語横断的 interlingual でなければならないのか、言語内的かつ方言横断的または変種横断的 intralingual, interdialectal or intervaretiary なものは intercomprehension と呼ばれないのか(呼ばれるべきではないのか)」というものがある。たとえばデンマーク語話者とスウェーデン語話者の間で intercomprehension による会話が多かれ少なかれ成立するのは、デンマーク語とスウェーデン語の語彙や文法などがある程度似ているからである。そしてこの「語彙や文法が似ている」というのは同一言語の方言同士の関係性にも度々該当する。実際に、Ronjat (1913) が ‘intercompréhension’ と呼んだのは異なる方言間の会話である。たとえばドイツ語についていえば、ライプツィヒ出身者とウィーン出身者が会話する場合、意思疎通を損なわないが細微な発音上の違いが認識されると想定され、ここで行われるのは 2 つのドイツ語変種間での会話である。関与する複数の言語体系が同一の個別言語内の異なる方言・異なる変種でもよいのであれば、このライプツィヒ出身者とウィーン出身者の会話も intercomprehension ということになる。しかし、こういった同一個別言語の異方言間・異変種間で行われる会話をも intercomprehension と呼ぶとなると、今日 intercomprehension と一般的には呼ばれていない会話のうち少なからぬ会話が intercomprehension という概念の指示対象となり、かえって intercomprehension という概念の輪郭が不鮮明になりかねない。

以下では、intercomprehension の定義を言語横断性 interlinguality という観点から見ていきたい。まず筆者自身の主観ではあるが、一般に intercomprehension に関する研究が視野に入れているのは第一には言語横断的 interlingual な intercomprehension であるように思われる (Ueda in press)。この傾向は Ollivier & Strasser (2013: 36) が指摘している「intercomprehension に関する大抵の学習・教育プロジェクトで訓練されるのは書記形式に関する能力 (= 読解能力) であり、聴解能力の育成を志すプロジェクトは少ない」という事実とも関係があるかもしれない。一般に方言は書かれることが少なく、書かれることが多いのは各個別言語の標準変種である。そのため、書記形式の intercomprehension に関するプロジェクトが多く口頭形式の intercomprehension に関するプロジェクトが少なければ、研究において intralingual interdialectal (or intervaretiary) intercomprehension が取り上げられることは少なくなり、取り上げられるのは interlingual intercomprehension が多くなる。先行研究における intercomprehension に関する定義づけを見ると、便宜的な理由や定義づけを行う目的などの理由にもよるのかもしれないが、intercomprehension の言語横断性 interlinguality を明記する一方で、方言横断性 interdialectality や変種横断性 intervaretiarity には言及していない定義も少なくない。前章で紹介した intercomprehension の定義の中では、Möller & Zeevaert (2015: 314) による定義がそうである。そのほかの例として、Behrend (2016: 34) は「かなり単純化していえば、intercomprehension は「(言語) 間理解」もしくは「相互理解」と翻訳されうる」<sup>5</sup>と述べている。

<sup>5</sup> 本文中における「(言語) 間理解」と「相互理解」はそれぞれ以下のドイツ語原文中における *Zwischen(sprachen)verstehen* と *gegenseitigem Verstehen* に相当するものであり、ここで

他方、intercomprehension が言語横断的 interlingual とは限らないことを示す定義づけも確かに存在する。たとえば Meißner (2019b: 296) は intercomprehension が(1)言語同士の間だけでなく、(2)同一言語の方言同士の間や(3)言語と方言の間でもありうるとし、同論文ではまた「同一言語の方言間の会話が intercomprehension あるいは複言語的と呼ばれうるのかという問いの答えはまだ定かではない」(Meißner 2019b: 298)とも述べている。前章で紹介した Meißner (2017: 146) や Duke (2019: 2) による intercomprehension の定義でも、言語横断的 interlingual でなくとも変種横断的 intervariety であれば intercomprehension と見なされうることが示唆されている。

このように、intercomprehension の定義に関する「言語横断的 interlingual である必要があるのか」という問いについては、統一的な見解が存在しない。そして、この問題を掘り下げた論文が Ueda (in press) である。当論文では intercomprehension と見なされないものを‘non-intercomprehension’ (原文では‘Nicht-Interkomprehension’) と呼び、intercomprehension と non-intercomprehension という相補的な概念を用いつつ、上述の問題について以下のように述べた (Ueda in press) <sup>6</sup> : Intercomprehension を言語横断的 interlingual なものに限定するなら、intercomprehension と non-intercomprehension の明確な線引きは不可能である。なぜならば、言語と方言の識別は恣意的なためである。だが、反対の立場、すなわち言語内の intralingual でも方言横断的 interdialectal または変種横断的 intervariety であれば intercomprehension と見なされうるという立場をとっても、intercomprehension と non-intercomprehension の線引きは不可能である。なぜならば、この場合には受け手のレパートリーの中に話題となっている理解対象変種が含まれているかどうかは intercomprehension と non-intercomprehension を識別する際に肝要なわけだが、受け手が習得している変種と理解対象変種を客観的に同定することは難しいと考えられるためである。<sup>7</sup> こうした考察に基づき、Ueda (in press) は「言語横断性・変種横断性という観点を引き合いに出す限り、intercomprehension の概念を明確に定義することは不可能である」と結論づけている。

#### 4. ‘Intercomprehension’に充てられてきた和訳の妥当性

---

は便宜上このように和訳しているが、これら和訳は必ずしも適切ではない。原文 (強調マ) : Für den Terminus *Intercomprehension*, der sich aus dem Präfix *inter-* und dem *Internationalismus comprehension* (Verstehen) zusammensetzt – das stark vereinfacht mit *Zwischen(sprachen)verstehen* oder *gegenseitigem Verstehen* übersetzt werden kann –, [...].

<sup>6</sup> Ueda (in press) は intercomprehension を「既習言語／変種の知識に基づいて、学んだことのない言語／変種を多かれ少なかれ理解する、より正確には、既習言語／変種の知識に基づいて、学んでいない言語／変種で産出された書記形式もしくは口頭形式の叙述内容を推測する現象」と定義づけているものの、言語横断性に関する考察は intercomprehension をコミュニケーション形式や能力、学習・教育アプローチのいずれの意味で捉える場合にも有効だと考えられる。

<sup>7</sup> 「同定することが難しい」理由は、Ueda (in press) でははっきりと記述されていないものの、そもそも「言語変種」の概念が曖昧なためである (cf. Sinner 2014: 19, 23)。

本論の 2 章と 3 章では、intercomprehension の定義が非常に多様であること、それから「intercomprehension は言語横断的でなければならないのか」という問いに関して適切な回答を導くのが困難であること、の 2 点を確認した。これら 2 点を踏まえた上で、本章では‘intercomprehension’という概念に充てられてきた日本語訳を紹介し、それらの妥当性を検討していきたい。

日本語で執筆された論文等で intercomprehension という概念に言及しているものは非常に少ないため、まずは筆者の知るものを列挙する（ただし、同一の研究者による論文は 1 つのみを挙げる）：バウシュ&ヘルビヒ＝ロイター（2006）、大山（2014）、粕谷（2017）、吉島（2021）、木村（2021）。はじめにバウシュ&ヘルビヒ＝ロイター（2006）について、これはドイツ語で執筆されたものを翻訳し、さらに訳者の杉谷氏が注を加えたものである。Intercomprehension への言及は杉谷氏による「複数外国語教育を統合的に推進するための考察」一訳者による背景説明」の中で行われているものの、杉谷氏は intercomprehension という概念に触れながらもこの概念を和訳していない。次に、大山（2014）はフランス語で執筆された図書に対する書評だが、これにおいて intercompréhension は「相互理解教育」と訳されている（大山 2014: 176）。粕谷（2017）は intercomprehension をまさにテーマとした論文であり、「間言語理解」という和訳を用いている。そしてこの和訳は粕谷氏と佐藤雅人氏による発案だとされる（粕谷 2017: 55）。吉島（2021）は intercomprehension を「異言語間相互理解」（吉島 2021: 7）や「異文化間理解」（吉島 2021: 12）と訳している。なお、当論文において吉島氏は intercomprehension を学習法として捉えている（吉島 2021: 7）。最後に、木村（2021）は intercomprehension がときに「相互理解」と訳されることを知りつつも、intercomprehension が「一般的な相互理解とは意味が異なる」ことから先述の粕谷（2017）に則って「間言語理解」という和訳を採用している（木村 2021: 83）。付け加えるなら、木村（2021: 89）は intercomprehension を間言語理解と訳すことに倣って関連概念‘interproduction’を「間言語産出」と訳している。

では、以下では上述の先行研究で intercomprehension に宛がわれてきた和訳それぞれについて検討していく。検討の対象となるのは「相互理解教育」、「間言語理解」、「異言語間相互理解」、「異文化間理解」であるが、intercomprehension の多義性（コミュニケーション形式、能力、学習・教育アプローチ）を考慮すると、「教育」や「理解」といった語尾を伴う点でいずれの訳も必ずしも最適とはいえない。もっとも、この指摘は欧米言語における intercomprehension や Interkomprehension、intercompréhension にも該当するだろう。したがって、この点は銘々の日本語訳に特有の問題というより intercomprehension という概念につきものな問題であるため、これについてはひとまず置いておく。

上述の 4 つの和訳の中で特に異質なものは「異文化間理解」である。たしかに言語学習を通じて新たな文化を知ることはあるだろうが、intercomprehension は一義的には言語<sup>8</sup>に関するものであるため、intercomprehension を「異文化間理解」と訳するのはあまり適切ではない

<sup>8</sup> ここでの「言語」は「個別言語」の意味ではない。

ように思われる。次に「相互理解教育」という和訳の問題点としては、「相互理解」という概念が（その意味解釈は文脈によって色々だろうが）一般的な語彙として既に存在することから、木村（2021: 83）が指摘するように、intercomprehension の特徴を十分に表現していないことが挙げられる。さらに、intercomprehension に関して実存する学習・教育アプローチは先述の通り受容志向のため、むしろ交流志向と合致する「相互」という表現も適切ではないように思われる。3つ目に「異言語間相互理解」について、まず「相互理解教育」の問題点と同様、「相互」という表現を学習・教育アプローチとしての intercomprehension に対する訳語として用いることはやはり最適とはいえないだろう。また intercomprehension の言語横断性 interlinguality に関する問題に関連付けていえば、「異言語間」という表現は必ずしも相応しくない（ただし、将来的に intercomprehension という概念の指す対象が言語横断的 interlingual なものに限定されるような流れが生まれれば話は別である）。このように考えると、「理解」という語尾を伴う点で問題が全くないわけではないが、既存の和訳表現の中では「間言語理解」という訳語が最も適しているように思われる。

以上のように、intercomprehension に相当する日本語訳はいずれも多かれ少なかれ何らかの問題点を抱えている。しかし、既に述べたように、そもそも intercomprehension という概念そのものに問題があるのも事実である。実際のところ、intercomprehension と完全に対応する和訳を設定するという狙い自体が無謀で、むしろ intercomprehension という概念そのものの更なる精緻化を進めるべきなのかもしれない。とはいえ、目下のところ概念の精緻化が必ずしも充分には進んでいない以上、intercomprehension に対して何らかの和訳表現を用いる場合、その文脈で intercomprehension がもつ意味（コミュニケーション形式なのか、特定の能力なのか、学習法・教育アプローチなのか、交流的なのか、受容的なのか、など）を踏まえた和訳を充てることが求められるだろう。その際、場合によっては intercomprehension という概念の多義性に関する補足説明も必要かもしれない。

#### [参考文献]

Beerkens, Roos (2010): *Receptive multilingualism as a language mode in the Dutch-German border area. A comparison of cross-language discourse in civil society organisations and governmental organisations*. Münster, New York, Munich, Berlin: Waxmann.

Behrend, Jana (2016): *Germanische Interkomprehension im universitären Bereich als Möglichkeit zur Förderung rezeptiver Mehrsprachigkeit in der EU. Subjektive Theorien von Studierenden zum Erschließen fremdsprachlicher Lesetexte nach dem EuroComGerm-Ansatz*. Doctoral thesis, Technische Universität Darmstadt.

Doyé, Peter (2005): *Intercomprehension*. Strassbourg: Council of Europe. Online available at: <http://rm.coe.int/intercomprehension/1680874594> (last downloaded on 30 Oct 2021).

Duke, Janet (2019): 1 Einleitung: Die Vielfalt der germanischen Interkomprehension. In: Duke, Janet (Ed.): *EuroComGerm. Germanische Sprachen lesen lernen. Seltener gelernte germanische*

- Sprachen*. Düren, Shaker, 1–16.
- Gilles, Fabrice (2017): *Valorisation des analogies lexicales entre l'anglais et les langues romanes: étude prospective pour un dispositif plurilingue d'apprentissage du FLE dans le domaine de la santé*. Doctoral thesis, Université Grenoble Alpes.
- Golubović, Jelena (2016): *Mutual intelligibility in the Slavic language area*. Doctoral thesis, Rijksuniversiteit Groningen.
- Gooskens, Charlotte (2020): The North Germanic dialect continuum. In: Putnam, Michael T. & Page, B. Richard (Eds.): *The Cambridge handbook of Germanic linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press, 761–782.
- Hufeisen, Britta & Marx, Nicole (2007): How can DaF/E and EuroComGerm contribute to the concept of receptive multilingualism? Theoretical and practical considerations. In: ten Thije, Jan D. & Zeevaert, Ludger (Eds.): *Receptive multilingualism. Linguistic analysis, language policies and didactic concepts*. Amsterdam, Philadelphia: Benjamin, 307–321.
- Hufeisen, Britta & Marx, Nicole (Eds.) (2014): *EuroComGerm – Die sieben Siebe. Germanische Sprachen lesen lernen*. 2. ed. Aachen: Shaker.
- Hülsmann, Christoph; Ollivier, Christian & Strasser, Margareta (2020): Projekte zur romanischen Interkomprehension. Ein Überblick. In: Hülsmann, Christoph; Ollivier, Christian & Strasser, Margareta (Eds.) in collab. with Bogensperger, Theresa: *Lehr- und Lernkompetenzen für die Interkomprehension. Perspektiven für die mehrsprachige Bildung*. Münster, New York: Waxmann, 45–51.
- Klein, Horst G. & Stegmann, Tilbert D. (2000): *EuroComRom – Die sieben Siebe. Romanische Sprachen sofort lesen können*. Aachen: Shaker.
- Kordt, Birgit (2018): Herausforderungen und Chancen eines affordanztheoretischen Ansatzes in der Fremdsprachenforschung mit Beispielen aus einer Studie zur Umsetzung von EuroComGerm in der Schule. *Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht* 29, 147–168.
- Marx, Nicole (2007): Interlinguales Erschließen von Texten in einer unbekanntem germanischen Fremdsprache. *Zeitschrift für Fremdsprachenforschung* 18, 165–182.
- Marx, Nicole (2012): Reading across the Germanic languages. Is equal access just wishful thinking? *International Journal of Bilingualism* 16, 467–483.
- Meißner, Franz-Joseph (2017): Interkomprehension. In: Surkamp, Carola (Ed.): *Metzler Lexikon Fremdsprachendidaktik. Ansätze – Methoden – Grundbegriffe*. 2. ed. Stuttgart: Metzler, 146–147.
- Meißner, Franz-Joseph (2019a): Mehrsprachigkeitsdidaktik. In: Fäcke, Christiane & Meißner, Franz-Joseph (Eds.): *Handbuch Mehrsprachigkeits- und Mehrkulturalitätsdidaktik*. Tübingen: Narr, 47–52.
- Meißner, Franz-Joseph (2019b): Europäische Mehrsprachigkeit und Interkomprehension in historischer Sicht. In: Fäcke, Christiane & Meißner, Franz-Joseph (Eds.): *Handbuch*

- Mehrsprachigkeits- und Mehrkulturalitätsdidaktik*. Tübingen: Narr, 294–300.
- Meißner, Franz-Joseph (2020): Interkomprehensions- und Mehrsprachigkeitsdidaktik in Deutschland. In: Hülsmann, Christoph; Ollivier, Christian & Strasser, Margareta (Eds.) in collab. with Bogensperger, Theresa: *Lehr- und Lernkompetenzen für die Interkomprehension. Perspektiven für die mehrsprachige Bildung*. Münster, New York: Waxmann, 25–44.
- Möller, Robert & Zeevaert, Ludger (2015): Investigating word recognition in intercomprehension. Methods and findings. *Linguistics* 53, 313–352.
- Müller-Lancé, Johannes (2019): Modellierung von Interkomprehensionsprozessen. In: Fäcke, Christiane & Meißner, Franz-Joseph (Eds.): *Handbuch Mehrsprachigkeits- und Mehrkulturalitätsdidaktik*. Tübingen: Narr, 316–321.
- Ollivier, Christian & Strasser, Margareta (2013): *Interkomprehension in Theorie und Praxis*. Vienna: Praesens.
- Ronjat, Jules (1913): *Essai de syntaxe des parlers provençaux modernes*. Doctoral thesis, Université de Paris.
- Sinner, Carsten (2014): *Varietätenlinguistik. Eine Einführung*. Tübingen: Narr.
- Ueda, Naoki (in press): Schwierige Abgrenzung von Interkomprehension und Nicht-Interkomprehension. Eine Überlegung mit dem Schlüsselwort ‚Interlingualität‘ und mit einem kritischen Fokus auf das Abstandskriterium. *Sprachwissenschaft Kyoto* 21.
- 大山万容 (2014) 「書評 : Caddéo, Sandrine & Jamet, Marie-Christine, 2013. L’Intercompréhension: une autre approche pour l’enseignement des langues. Paris: Hachette, 191 p.」 *Revue japonaise de didactique du français* 9 卷、176–178 頁。
- 粕谷雄一 (2017) 「日本の外国語教育における「間言語理解」の意義について」『言語文化論叢』21 号、55-81 頁。
- 木村護郎クリストフ (2021) 『異言語間コミュニケーションの方法——媒介言語をめぐる議論と実際』大修館書店。
- バウシュ・K. R. & ヘルビヒ = ロイター・B. (オッテン・E. & ショアマン・R. 協力) (杉谷眞佐子 [訳・注]) (2006) 「複数外国語教育を統合的に推進するための考察—学校教育における外国語学習促進へ向けての 14 テーゼー」関西大学外国語教育研究機構 [編] 『関西大学外国語教育研究』12 号、71–88 頁。
- 吉島茂 (2021) 「21 世紀の世界社会における言語教育と第三次言語社会化 : C o E の [1+2] のもつ意味」『言語教師教育』8 卷 1 号、1–15 頁。